

塔ノ沢温泉 2018



2018年12月

旅のチカラ研究所 植木圭二

晩秋の箱根塔ノ沢温泉に妻と泊まってきた。この旅は一週間前に急きょ決まったもので、温泉宿に泊まっただけの旅でありながら、江戸時代にタイムスリップしたような気分にくれた。

■ 貴方だけ特別

一週間前に箱根の「一の湯グループ」からメールが着た。そして来週の数日だけ特別に貴方だけ格安で部屋を提供するという内容だ。このグループは箱根に何店舗かを展開する旅館グループで「箱根で平日1万円以下・・・」をポリシーにしている。

それがほぼ半額で泊まれるという。宿にしてみれば空室にしておくよりも誰か泊まってくれた方がありがたいし、こちらにしても渡りに船で、それも貴方だけ特別だというのも人間の心理を上手くついている。もちろん私だけにこのメールが着た訳ではないことは重々承知している。

早速私たち夫婦は塔ノ沢の「一の湯本館」を予約して、本日訪れることになった。

それにしてもここの経営者はなかなかしっかりしているのに違いない。

■ 箱根温泉郷の塔ノ沢温泉

箱根温泉という言葉はかつて存在せず、戦前までは湯本温泉、塔ノ沢温泉などと個々の名称で呼ばれていた。現在は箱根というと湯本から芦ノ湖、さらに仙石原までの広い地域を示している。

江戸時代までの箱根は芦ノ湖畔の箱根神社周辺の集落名であった。江戸時代初期にその箱根集落に関所を置こうとしたが、地元の反対などの理由で少し外れた現在の関所跡ところに関所が置かれた。そしてその関所の場所が箱根を名乗り、元の箱根は元箱根と名乗るようになった。従って近年までは箱根とは関所の場所だけ、少し拡大解釈しても元箱根までだった。

ところが戦後になって小田急と西武という2大企業グループが競ってこの一帯を開発した。何しろ富士山、芦ノ湖、相模湾と風光明媚で首都圏から近いという一等地で、歴史もあつて温泉もいくつも湧いている。

何事もライバルがいると猛烈な勢いやアイデアが出てくる。その結果、箱根ブランドが確立して箱根温泉という今までにない温泉名が出てきた。現在はこの新しい箱根一帯には温泉が21湯もあり、それらを箱根温泉郷と称するようになった。

その中で小田急線の箱根湯本駅周辺の湯本温泉は開湯が奈良時代で極めて古い。そこに隣接する塔ノ沢温泉の開湯は 1605 年というから江戸時代初期だ。

■一の湯本館

私たちが泊まっている一の湯本館も古く、木造 4 階建て数寄屋造りはなかなかのものだ。



私は旅館の風情や雰囲気の評価する術として廊下を意識して見るようにしている。この宿は木造なので木の階段をギシギシ登っていくと 2 階、3 階に客室があり、その入口から軒が廊下に出ている感じが独特でとても良い雰囲気をかもし出している。



部屋は木造の古い部屋を直し直し使っている感じが何とも良い。鏡台や椅子テーブルなどの調度品も時代を感じさせてくれる。

早川という溪流が宿の周りをコの字に曲がって流れているので国道1号線側の宿の入口方面以外は早川沿いにある。だから宿のほとんどの客室から溪谷の景色と川のせせらぎを気持ち良く感じることができる。

晩秋の紅葉が最後の頑張りを見せてくれて、私たちを迎い入れてくれる。



4階にある食事処は広く景色も良い。眼下に早川溪谷を眺めての食事は、舌だけではなく目にも贅沢な気分にしてくれる。



■温泉に浸かる

温泉は湧出温度 47℃で PH9.1 というアルカリ泉で、もちろん源泉かけ流しである。47℃の源泉をそのまま湯船に流している訳ではなくやや温めの良い温度になっている。恐らく 40℃か 41℃だろう。温度調節をしているのか、たまたま湯を引いてくる間に温度が下がってしまっているのか分からないが私好みの温度だ。

アルカリ泉の柔らかさと相まって心地よく湯船に迎え入れてくれるので長湯もさせてくれる。

泉質よりも驚くのは、この風呂の洗い場である。通常の洗い場はというと鏡があってお湯や水の出るカランがあるが、この洗い場にはそのカランがない。鏡の手前にあるのは幅 40cm 程、深さも 40cm 程の温泉が流れている温泉槽で、ここから桶で湯を汲んで洗ったり、かけ湯にしたりする。

正確に言うと後から付けたのであろう冷たい水が出る水道の蛇口はある。ただ温泉槽のお湯はあまり熱くはないので私は桶で湯を汲むということが楽しく、病みつきになりこの水道は使わなかった。お湯はかけ流しで次から次へ供給されるので、いくら汲んでも減らない。

昔は蛇口というものがなかったので、このような温泉槽になったのだろう。こんなところにも江戸時代を感じることができる。そして湯量が豊富でないとできない仕組みだ。

私は同じものを東北の古い温泉場で体験したことがあるが、まさか箱根の塔ノ沢で体験できるとは思わなかった。



私が一人で入浴していると後から風呂に入ってきた一人の若者がその温泉槽に戸惑っていたので使い方を教えてあげたところ、大そう感激していたことに何か新鮮なものを感じた。

そしてこの洗い場を見ながらただ湯に浸かっているだけでも、私としては大変癒されるのだから人間とは不思議なものである。

■この宿は・・・

この宿は若者が多く働いている。私が宿の評価をするときに見ているポイントは若い人が楽しんで働いているか、それも自分の仕事として任されているかである。

何故それがポイントかという一般的なには旅館やホテルの仕事は辛くて長時間労働も多い、その割には賃金が安い。それなのに一生懸命働くのは旅や旅人を受け入れるのが好きという以外に、宿やその周辺環境が良いかとか経営者に心惹かれているのだろう。

何よりも経営者側からすると細々でも続けて行ければいいとか、自分の代で終わりにしようなどと考えている宿では絶対に若者を雇わない。若者を雇うというのは宿の将来を明確に描いていないとできないことなのである。

その意味においてこの宿は十分に合格点が付けられる。フロントも食事処のスタッフも若い女性社員がテキパキと仕事をこなしている。昔若かった人(?)も含まれてはいるが、それはバランスの問題でスタッフ全員が若いよりも少し安心感が得られる。

風呂ではあまり他のお客とは会わなかったが、夕食の時には宿泊客のほとんどが食事処に現れる。総勢でおよそ30人くらいだろうか、老若男女そろっている。それも半分は外国人で、欧米系、中国系、東南アジア系と実にバラエティに富んでいる。彼らはリラックスしつつも存分に宿や料理を楽しんでいるように見える。

この外国人たちの楽しむ姿を見ていると宿の経営戦略が功を奏していると感じる。

経営戦略とはやや大袈裟だが、私が勝手に考えるこの宿の経営戦略とは箱根の温泉宿という立場を活かして日本文化の神髄をリーズナブルな価格で多くの人々に、特に外国人に伝えるというものだろう。そう考えると若者たちが楽しく働いているのも納得する。

従ってこの宿では入浴や食事など説明が全て英語でも表記されている。それだけではなく宗教上の理由で牛肉はダメだから鶏肉にしてくれとか、魚を生で食べるのが苦手だから天ぷらにしてくれとか、各国対応の個別の「おもてなし」をその場その場で見事にこなしている。それはもちろん昔若かったスタッフ、つまりおばさんたちも片言の英語で果敢に対応している。

江戸時代から続いているというのは単に古いのではなく、常に新しいことにチャレンジしているからこそかも知れない。

この宿のおばさんスタッフの果敢な「おもてなし」の姿を見て人間もこうでなくてはいけないと強く思う。ただ歳を重ねるのではなく新しいことにチャレンジする人だけが人生を充実させ楽しむことができるのだろう。

■安・近・短の旅

ここ塔ノ沢温泉まで私の家から車でも電車でも1時間程で来ることができる。神奈川や東京に住む者にとって、箱根は近くて身近な観光地だ。

2018年11月28日(水)~29日(木)、一泊旅行を夫婦2人約1万円で楽しむことができた。今回のように安く泊まれることになれば、安・近・短この上ない旅ができる。

そのためには宿泊予約の際にはメール会員登録をおススメする。